

若年あれこれ

若年

吉峯系圖文書に記してある記録によると、後二條天皇の嘉元三年（1305年）五月、尾張の国丹羽郡のうち寂念村を、地頭職が、田畠・家などを持明院中納言法印最喜より上野房静眞に譲り與へるものなりとある。この譲状の文書から今より約七百年も前の正和三年花園天皇の時代に寂念（寂然）村という村があったことが分かる。

下に吉峯系圖文書を示す。

譲與

尾張國丹羽郡寂念村内地頭本地分田畠在家等事。

上野房静眞

右彼田畠在家等者。最喜先師重代相傳所領也。爰静眞幼少昵近之上。芳契依異于他。

彼田畠在家等。永代所譲與于静眞也。至于子々孫々。不可有他妨。仍譲状如件。

嘉元三年五月廿二日 法印最喜（花押）

裏書云

任此状。令領掌之由。依仰執達如件。令領掌之由。依仰執達如件。

嘉曆三年正月廿一日 相模守（花押）

ゆづりわたす

おはりの國にわのこほりのうちじやくねんのむらのでんはたざいけらの事。

右かのぢとうしきのでんばたざいけらは。ぢみやうみんの中納言のほうみんの御坊より。

去嘉元三年五月廿二日。じょうしんにゑいだいゆづりたびたる所りやう也。しかるあいだ。

ちやくしさど坊かうしんに。かの御ゆづりをあひそへて。ゑいだいゆづりあたふるとこ

る也。まつたくのさまたげあるべからず。のちのために讓狀如件。

以上歴史上また古文書上、当地には今から七百年も前に若年（寂念・寂然）村が存在していたことが分かるのである。

出屋敷

では、なぜ「出屋敷」という呼称が生まれたのか。

前述の通り、若年（寂然）という名称は七百年前から存在しており持明院法印最喜の所領であったが、度重なる木曾川の大氾濫があったため一時その存在が途絶えた。

後に慶長七年（1602年）、即ち今より四百年以上前に山口吉左工門一寶全久という人があった。この人の墓は栽松寺墓地北入口のすぐ西側にある石塔がそれである。この人がこの地に堂宇を建立し、寂然山栽松寺の開基となられた。そして若年（寂然）村の再起がなった。

その後巡見街道が開かれ村を南北に縦貫することにより、若年村は交通至便の要衝となった。そのようなことから、現在の大赤見地内の小字である上地下（カミジゲ）・下地下（シモジゲ）・地内（ジナイ）・新田・上市場・下市場から人々が移住してきた。当時は寂然（若年）と称していたが、明治三十年頃より誰言うことなく出屋敷（赤見出屋敷の意味）というようになったらしい。当時若年に移住してきたのは大赤見からばかりであったために、赤見の出屋敷、変じて単に出屋敷となっていた。今でも大正生まれの人はほとんど若年といわず出屋敷と呼んでおられる。

尚、明治三十年の郡道（現県道一宮布袋線）改修により、大赤見以外からも人が移住してくるようになったといわれている。下って昭和六年、県道一宮犬山線改修による地元負担金の問題に端を発し、大字大赤見と分離し独立する旨宣言したのである。当時の丹羽郡

西成村村議会の裁断によって完全独立し、旧名である若年の名称がここで復活するに至ったのである。

出屋敷、出屋敷といわれていた時代は、明治三十年頃より昭和十一年までのことであった。本籍は「大赤見」で通称が「出屋敷」。その通称が、大赤見と分離したために再び本来である「若年」へと戻ったということを特に申し述べておくものである。

若年区記念事業顕彰記念碑

(原文は縦書き)

大赤見ト分離	昭和六年八月	若年ト改ム	当時三十三戸
縣道一宮犬山線		昭和六年改修	
縣道布袋奥線		昭和八年改修	
縣道一宮布袋線		昭和十一年改修	
村道若年西大海道線		昭和十五年改修	
一宮市ト合併		昭和十五年九月二十日	当時六十戸

この記念碑の石は、現在歩道橋東昇口の東にコンクリート橋があって、そこは昔巡見街道の石橋があったところであるが、その石橋の一つを持ってきて記念碑としたものである。この記念碑は栽松寺隣の白山社境内に建てられている。

乗り合いバスの想い出

昭和七年二月県道一宮犬山線が改修なって、名鉄が東一宮発古知野行きのバスを開通させた。一宮市営バスは、昭和七年十一月頃両郷寺と若年の境界まで運転を開始した。

川口バスは、昭和十一年より一宮から布袋を經由して古知野まで運転を開始した。同年

一宮布袋間の県道が改修なって、運行を始めた川口バスの車体は銀色で通称銀バスと親しまれていた。天井が低く、名鉄バスと比較すると少し小型であった。数年間営業していたが、止めて名鉄に代わっていった。

市営バスの方は文字通り一宮市の営業だから(若年は西成村だから)、両郷町を境にして現小岩商店の処から廻ってしまって若年に来なかった。これまた廃止されるまで数年間の運命であった。バスの色はチョコレート色で、名鉄と同じ大きさでスマートであった。

これまでの巡見街道ではとてもバスを走らせる道路幅ではなかったが、県道一宮犬山線が改修なって七メートル二十センチの新道となり、一宮市と古知野町が名鉄バスで結ばれることになったのである。

バスの色は柿色で今のクロネコヤマトの宅急便のようで、車体は角々して背高く正に昭和の初めにふさわしいものであった。まだ道路は出来たてで砂利も十分に敷いてないので雨の日は道路が凸凹になって、へこみにはまった大きなバスは忽ち立ち往生になることもしばしばであった。その時は私ども子供も動員されてバスの後押しをさせられ、ぬかるみ脱出に大活躍したものである。懐かしい思い出の一齣である。

《出典：山口伊三郎・山口周一 著「若年今昔記」 平成 20 年》